

2005年日本国際博覧会における高度情報通信社会の

実証検討

Rediscovering Nature's Wisdom

キーワード 国際博覧会、自然の叡智、高度情報社会

1. 調査の目的

2005年に愛知県瀬戸市において「2005年日本国際博覧会」が開催され、その全体テーマは「Beyond Development : Rediscovering Nature's Wisdom (新しい地球創造：自然の叡智)」と決定している。国際博覧会(万博)では「伝統的な知恵、世界の叡智と現代の科学技術を融合し、自然と生命に対する豊かな共感と想像力を育むことで、人類共通の課題を解決し、地球上に自然と人間が共生し続ける豊かな世界を構築していくこと」を目指し、人類共通の課題について世界中の一人一人に考える機会を提供する「問題提起型の知の Expo」、世界中の叡智をコラボレーションすることにより次世代の文明、文化の雛形を創造する「来るべき時代への実験場」となる。

しかしながら、その根源である「叡智 Wisdom」についての本質をより深く洞察し、再発見していくための検討は緒に付いたばかりであり、まずは色々な切り口から知に迫り、多様な捉え方、思想を集めることが重要である。

本調査は、「知恵・情報」について我が国をリードする優れた見識をお持ちの方々により様々な角度から検討いただき、その結果をもとに Wisdom を Rediscover していくための「出発点」を構築し、同時に万博に向けて自発的にそうした流れを担う新たなコミュニティを形成する「原初」について提案した。

2. 調査研究成果概要

(1) 調査の構造

2005年日本国際博覧会 高度情報通信社会検討委員会による議論

2005年日本国際博覧会 高度情報通信社会検討委員会(敬称略)

| | | | |
|-----|------|--------------------------|-----|
| 委員長 | 公文俊平 | 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター | 所長 |
| 委員 | 浅田 彰 | 京都大学経済研究所 | 助教授 |
| | 小栗宏次 | 愛知県立大学情報学部 | 教授 |
| | 隈 研吾 | 建築家 | |
| | 佐伯 胖 | 東京大学教育学部 | 学部長 |
| | 竹村真一 | 東北芸術工科大学 | 助教授 |
| | 浜野保樹 | メディア教育開発センター | 助教授 |

廣瀬通孝 東京大学工学部 助教授
松岡正剛 編集工学研究所 所長
村井 純 慶應義塾大学環境情報学部 教授
安田 浩 東京大学国際・産学共同研究センター 副センター長

検討の項目

- ・ 知恵・情報について万博を通じて伝えたいメッセージ
- ・ 知恵・情報時代における万博のあり方
- ・ 21世紀初頭の高度情報通信社会の実験場として万博が実現すべき環境
- ・ 万博を通じて具体的にトライすべきプロジェクト手法の検討
- ・ その他（主体的に取り組むべきこと、留意すべきこと、陥ってはならないこと等）

有識者からの聞き取り調査（インタビュー）

我が国を代表する「知についての有識者」から、「知」についての見解や「これからの万博のあり方」等についての見解を聞き、委員会における検討の参考とした。

インタビュー対象

金沢工業大学人間情報システム研究所所長 鈴木良次氏
理化学研究所脳科学総合研究センター所長 伊藤正男氏
理化学研究所ゲノム科学総合研究センター所長 和田昭允氏
東京理科大学生命科学研究所所長 多田富雄氏
北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科長 野中郁次郎氏
明治学院大学国際学部長 竹内啓氏
名古屋大学大学院理学研究科長 野依良治氏
東京大学大学院教授 原島博氏
東北芸術工科大学副学長 長谷川文雄氏
多摩美術大学美術学部助教授 久保田晃弘氏

インタビューの項目

- ・ 生体活動における「知」はどこまで明らかにされているか
- ・ 総合的な人間理解はどこまで進んでいるか
- ・ 個人、社会における「知」の体系化はどこまで明らかにされているか
- ・ 21世紀における知のパラダイムシフトについてどのように考えるべきなのか
- ・ 知恵・情報の時代における万博のあり方、環境・具体的プロジェクトのアイデア

(2) 調査の内容

知恵・情報時代の到来

来るべき21世紀には、「経済・産業中心の時代」に代わって「知恵・情報中心の時代」の到来が予想される。経済・産業中心の時代においては、法的強制や市場取引による資源配分・調整によって、様々な問題が解決されているのに対し、知恵・情報中心の時代においては、情報通信技術の急速な発展・高度化にも支えられ、知恵・情報の創生、流通、共有、利用等が飛躍的に容易となり、生活、文化、経済、環境、介護、福祉、健康、社会保障、教育などの社会的諸課題が情報コミュニケーションを通じた知的影響力の行使（説得・誘導）によって調和的・自律的に解決されるという新たな社会システムが創り出されていくものと期待される。

知恵・情報活動の特徴

来るべき時代において人間の主要な営みとなる知的活動は、発信者から自発的に情報の発信がなされ【創生・流通】、受信者がその情報を自発的に認知し【共有】、それを自発的に有効に用いた【利用】場合にはじめて成り立ち、価値あるものとして認識される。そこで、重要なことは「自発性」と「つながり（関係）」の確保である。即ち、知恵・情報というものは、送り手・受け手の自発的連携・接続が一旦欠落すると、情報の伝達どころか存在までもが確認できなくなる。つまり、「情報はひとりではいられない」わけであるし、「情報はひとところに止まってもいられない」のである。さらには、情報はコミュニケーションの成立によってのみ存在し続けるのであり、より豊かなコミュニケーションを支えるオープンでボランタリーなネットワークを永続的に行うことと、そのための社会システムを作り上げることが、より豊かな知的創造活動の実現のためには不可欠である。

つまり、効果的な知的活動を行うことは、自発性を押し殺す強制型の社会システムの下では、もとより不可能であるし、また、人間の利己心の活用により経済活動の最適化を企図した市場システムの下においても、一定の限界がある。なぜならば、市場原理によって引き出せる情報には、一定の制約がある。つまり、市場原理のもとでは、発信者には経済的利益につながる情報は自発的に発信するが、そうでない情報を自発的には発信しないからである。

知恵・情報時代の社会システム

大量印刷技術・大量輸送技術・電波技術・画像技術・音声技術などのハード・ソフトテクノロジーとコンテンツ編集技術に支えられたマスメディアの登場によって、人類の知的情報活動は飛躍的に高度化したといえるが、インターネットの出現は、人々がオープンにボランタリーにネットワークしている状態をそこに普遍的・永続的に発生せしめた点において、画期的であった。

しかしながら、インターネットは確かに大いなる可能性を我々人類に提示したものの、現在のインターネットが実現しているコミュニケーションのパターンも、また、そこに巻き込んでいる人々の数もまだまだ限られている。

本格的情報社会の実現を図るためには、単に人間の情報処理活動をサポートするためのソフト・ハード技術の発達を図るだけでは不十分で、より知的で文化的で高度な情報編集活動を支えるための情報技術・方法・制度・環境・人材などを大量に生み出し・広めていくことが必要となる。

こうした様々な努力の結果、誰もが時空を越えて情報を創生し、よりオープンで大量な良質のコミュニケーションを行うようになれば、弁証法的な価値創造を連続的に行うことも可能となる。そのような社会においては、誰もが知恵・情報を共有する智民として、政策形成の場や市場に参加し・携わるようになる。マーケティング・広告・サービスの構造も当然に変化するだろうし、代議制ではなく、全員討議・全員投票による政治システムの構築も可能になるとと思われる。

知恵・情報社会における日本の役割

このような知恵・情報社会の実現には、異文化同士が出会い・ぶつかり合い・交わり合う、即ち、コミュニケーションしていくことが大変に重要である。日本は、歴史的にも、文化相対主義的な土壌をもち、古来より様々な文化・文明をすばやく取り入れ、それをうまく消化・アレンジしてきたし、戦後の高度経済成長期においても、貿易立国として加工・編集活動を得意分野としてきた。こうした観点から、日本は、まさに異文化がコミュニケーションする場として最適であることは間違いないし、さらにいえば、わが国は、そうした知恵を取り扱う叡智を有してきたともいえるかもしれない。来る21世紀においては、日本は知恵・情報を自ら創生するかたわら、内外からも多くの知恵・情報を受信し、それらを再度加工・編集して発信するメディア立国を目指すことが可能であり、また、それを志すべきである。

高度情報社会の実証の場としての万博

21世紀初頭、知恵・情報の時代の黎明期に行われる、21世紀最初の万博である2005年日本国際博覧会は、知恵・情報の創生・流通・共有・利用に関わる新たな情報流通・編集システムを備えた高度情報社会の実証を行う場として非常に重要な位置づけを持って来るであろう。現在から2005年までの間、我々は、知の時代、知の社会への準備として、知恵・情報の創生・流通・共有・利用のための手法、方法、制度、環境を開発・確立させるとともに、膨大な知恵・情報を扱うための編集技術・情報技術確立させなければならない。そして、そのような高度な技術を使いこなし、その意義と意味を真に理解した人材（智民）を育成・発掘する必要もある。こうした様々な21世紀への準備を、社会全体を挙げて、既存社会の制約にとらわれずに、思い切って取組める

「来るべき時代への実験場」として、万博の場を活用することは大変に意義深いことといえる。